医療ジャーナリスト
村上紀美子

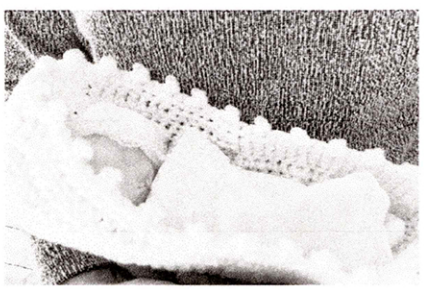
第21回

みじかい命を抱く
手編みゆりかごで家族の記憶

人生終わりの日々が，生後数日間，数か月，あるいはお腹の中で，になることもあります。

年間で，妊娠満12週以降の死産は1万9608人（うち自然死産が約9247人，人口死産が約1万361人），22週～生後7日の周産期死亡は3046人でした。約92万人の年間出生数の2.4%になります（2018年人口動態調査・概数）。

子宮内胎児死亡は妊娠10か月に最多で，次いで妊娠5～6か月です。胎内で育んできた母親，誕生を楽しみにしてきた父親や祖父母，弟や妹を迎える楽しみと不安の混ざった幼い兄や姉……それぞれに気持ちは複雑に揺れます。赤ちゃんに会いたくないような，会いたいような，見せたい，見せたくない，抱っこしたい，怖い……。



かわいいおくるみのような，ふわふわ編みのゆりかごで，お父さんの胸に抱かれて。

＊

みじかい命を終えた小さな赤ちゃんに触れるきっかけになればと，毛糸で編んだ小さなおくるみのようなゆりかごを渡す活動が始まっています。春日政美さんたちの「ちょうちょとおはな」です。

産科やNICUや小児科のナースステーションにこのゆりかごを置きたいと依頼されれば，3色セットで届けます。病棟で実際に使う機会はもちろん，そんなに多くはありません。ある月はゼロ，ときには3枚，という程度です。

助産師や看護師が「抱っこしますか」と声をかけても，お母さんによっては赤ちゃんに会うのをためらう様子も見られます。そういうとき「こんなゆりかごがありますよ」と紹介すると，「あ，使ってみたい，会います」と気持ちが動くことがあるのです。

きれいな黄色や藤色やピンクなどから「どの色にしようか」と選ぶのは，親としてわが子のためにできること。そっと寝かせれば安定して抱っこできて，小さな家族だという実感が伝わります。写真のように。

このゆりかごを手にした人からの感想が，メールで寄せられました。

「22週で心音が聞こえないと分かり悲しむだけでしたが，このゆりかごで，泣いてばかりではなくこの子のためにできることをしよう，と気持ちが変わりました。1人じゃないと思え，してあげたいこと，できることは全部できて後悔なく天国に送り出せました」

18週で亡くしたママから「病院のスタッフから，亡くなった赤ちゃんを抱くことも，服を着せることもできませんと言われました」というメールが届きました。今でもこんな寂しいケアがあるという現実に，春日さんの表情は曇ります。

先日，岩手の「赤ちゃんを亡くした親の会」主催の医療者向けの勉強会で紹介したところ，助産師や看護師がゆりかごを持ち帰ってくれました。「もらわれていったゆりかごは，どんなふうに使われているかな～。亡くなったわが子をかわいくしてあげることは，ママの心を救うのです」と春日さん。活動に込めたメッセージは確実に伝わっていると実感しています。

＊

このゆりかごの活用を検討したい場合の連絡は「ちょうちょとおはな」cyoucyo.ohana1@gmail.comへ。編んでみたい方，毛糸代や活動費の寄付も歓迎です。ほかにも各地で，小さな赤ちゃん用の洋服を縫っているグループなどいろいろな活動が増えています。

むらかみきみこ◉ターミナルケア・医療安全・在宅ケアのテーマで，国内各地，海外10か国を継続取材。主な著書に『患者の目線―医療関係者が患者・家族になってわかったこと』（医学書院），『納得の老後―日欧在宅ケア探訪』（岩波新書）。

0917-1355/19/紙：¥500/電子：¥750/論文/JCOPY